『ICU比較文化』53〔2021〕
Article accepted Sep. 30, 2020

ICU Comparative Culture
No. 53 [2021], pp. 167-201

〈翻訳〉

第三代シャフツベリ伯爵『センスス・コムニス――機知とユーモアの自由についての随筆――』日本語訳（下）[1]

菅谷　基

［60］貴族と宮廷を話題にした上で、そのあり方を礼節と良識の基準と認めるどころか、ある意味でその反対だと語ったローマ人の風刺家がいるが、彼の風刺は非凡なものに思える。

> 実に、共通の感覚も稀なものだ、あのような
> 境遇にいれば――[2]

［61］ところが、一部のきわめて独創的な注解者たちは、この一節を一般に理解されているのとは全く違う仕方で解釈している[3]。彼らはギリシア語の派生語を踏まえて、この詩人の言う「共通の感覚」を公共の福利や共通の利益に対する感覚を意味するものと捉えている。それは共同体ないし社会に対する愛であり、自然感情や思い遣り、厚意であり、人類の共通の権利や同種族間の本性的な平等に対する正しい感覚から生じる類の礼儀だ。

実際、物事を丁寧に考えれば、いくらティベリウスやネロの治世といっても、あの詩人がローマにあるほどの宮廷に向かって能力や知力を否定するというのは考えにくいことに思えてくるはずだ。もし思いやりのことや、人類にとっての公共の善や共通の利益に対する感覚のことでなかったとしたら、それがあるべき宮廷の精神なのかどうかを問題にしたところでそれほど深い風刺にはならなかった

だろう。［62］宮廷人たちの間にどんな共同体が存在していたのかということや、絶対的な君主とその奴隷的な臣下たちとの間にどのような公共体が存在していたのかということも、理解できなかっただろう。本物の社会といっても、私的な善に対する感覚しか持っていない者たちの間にそんなものはないのだ。

そういうわけで、例の詩人の糾弾は頭ではなく心について申し立てられたものなのだと考えてみれば、それほど度の過ぎたものとは思われなくなるだろう。彼は宮廷の教育について思索しながら、その教育は国を目指す感情を生み出しそうなものではないと考えている。彼は若い王侯たちについても、世間の「若旦那様」のような連中だとみなしている。つまり、若い王侯たちは、情念に身を委ね、放縦のかぎりを尽くすように鍛えられるうちに、人間に対して軽蔑や無視を貫くようになるわけだ。もっとも、恣意的な権力が容認され、暴政が崇められるところにいる人間は、ある意味でそうした軽蔑や無視に値するのだけれど。

［63］あの青年に言うことはこれで十分だ。評判の伝えるところでは
彼は思い上がり、ネロとの血縁に拘っているそうだ[4]。

公共精神というものを生み出せるのは、社会的な感覚、すなわち、人間という種族との分かち合いの感覚だけだ。さて、平等な相手をほとんど知らず、自分が仲間関係や共同体の法に服従すると考えないような者たちは、この感覚を分かち合う者、この共通の感情を共有する者とは到底言えない。そういうわけで、道徳と優れた統治は共に進んでいく。美徳に対する本物の愛は、「公共善」についての知識なしにはあり得ない。そして、絶対的な権力のあるところに、公共体は存在しない。

暴政の下に暮らし、その権力を神聖なものとして賛美することを身につけた人々は、道徳と同じように宗教においても堕落してしまう。［64］彼らの理解では、国家と同じように、宇宙においても公共善が統治の尺度やルールになることはない。彼らは「善いもの」や「正しいもの」について「意志と権力が作ったも

の」というくらいの概念しかもっていない。彼らの考えでは、公平さを備えた法を無くしたり、道徳的な公正さを好きなように変えたりできないかぎり、全能が全能であることも難しいのだろう。

こうした類の偏見と腐敗があるとはいえ、公共的な原理が倒錯と低迷を極めている場にもなお公共的な原理にかかわるものが存在することは明らかだ。最悪の政治、つまり端的に専制的な種類の政治の下でも、その政治に熱意や愛着が向けられている例に事欠くことはない。もっとましな統治形態のためにあるような忠誠や義務も、他の統治法が知られていなければ、きっとこの〔専制的な〕政治に捧げられるだろう。東方の国々や数多くの未開の民族にはこの手の実例が存在したし、今も存在している。[65] 彼らがその君主に対して抱く個人的な愛情は、どれほど過酷な仕打ちを受けても変わらないものであるし、人間同士の統治や秩序を目指す感情がどれほど自然本性に適っているかを物語るものかもしれない。人々は、自分たちを大切に保護してくれる公共的な親や共通の為政者といったものを実物としては知らないとしても、そういう者がいるはずだと想像するだろう。ちょうど生まれたばかりで母親を見たことのない生き物のように、自分の母親を空想しながら、（自然に促されるままに）寵愛と保護を求め、似たような姿をしたものにその空想を当てはめるだろう。そして、本物の義父や家長の代わりに偽物を据え、法に適った統治や正しい君主に代わるものとして暴君にさえ従い、その血筋と世襲の全てに耐え続けるだろう。

天に感謝したいところだが、僕らブリトン人は、その先祖から統治に対するもっとすぐれた感覚を受け継いでいる。[66] 僕らには「公共体」や「国制」という概念があるし、立法府や行政府を編成する方法についての概念もある。僕らはこの種の度量衡を理解していて、権力や財産の均衡について正しく推論することができる。僕らがここから導く公理は、数学の公理と同じくらい明白なものだ。僕らの知識が日々増えていくにつれ、政治における「共通の感覚」が何であるかということもますます明らかになっていく。それならば必然的に、僕らは政治の基礎である道徳についても、同様の感覚を理解するようになるはずだ。

笑える物言いだが、人間は統治機構が形作られている状況にいるかぎり社会的な行いや誠実な行いの責務に拘束されるが、「自然状態」と呼ばれる状況ではそうではないということが言われている。現代哲学の流行の言葉遣いで語るなら、「社会は取り決めに基づいているのであって、全ての人がもっている私的で制限のない権利は、自由な選択と約束を通して多数者の手に、あるいは、多数者が指名した者の手に引き渡される」というわけだ[5]。［67］さて、この約束そのものは自然状態の中でなされる。それならば、自然状態の中で約束に拘束力を与えられるものがある以上、他の全ての思い遣りある行いが同じように僕らの現実の義務や自然な役割となるはずだ。つまり、信義や正義、誠実や美徳といったものは自然状態の頃から存在していたか、一度も存在したことがないかのどちらかだ。政治的な統合や連合といっても、それに先立って存在していないような正不正を作り出すことはできない。契約に先立って自由に悪事を行っていた者は、都合がいいと思えばその契約を自由に破るだろう。自然の中の悪人は理屈を変えることなく政治の中の悪人となり、好機とみればすぐに自分の政治的能力を捨て去るだろう。その道に立ちはだかるのは自分の口にした約束に過ぎない――「人間は自分の口にしたことを守るよう拘束されるのだ。」「なぜですか。」「口にしたことを守るという約束を口にしたからだ。」――［68］道徳的正義の起源、政治的統治と忠誠の発生についての有名な説はこういうものじゃないか！

さて、僅かな意味でしか「自然」を語らない哲学に対するこの手の粗探しは済ませて、次のような原理を据えても差し支えないだろう。すなわち、「ある生き物ないし種族において自然本性に適ったものがあるとすれば、それはその種族自体を保存し、その幸福と維持に貢献する」という原理だ。もし本来の純粋な自然において約束を破ったり裏切りを犯したりすることが不正であるなら、何かしらの点で思い遣りに反するものが不正であり、何かしらの仕方で人類に対する自然な役割を外れることが不正であることも真実だ。もし食べることや飲むことが自然本性に適っているなら、群れることもそうだ。ある欲求や感覚が自然本性に

適っているなら、仲間関係に対する感覚も同じだ。両性間の愛着に自然本性からくるものがあるなら、子孫に向けられる愛着が同様に自然本性に適うことは確かだ。［69］さらに、子孫同士の愛着に自然本性に適うものがあるなら、同じ規律や組織の下で育った親族や身内の者同士の愛着も同じだ。こうして一つの氏族や部族がしっかりと形成され、一つの公共体が認知される。社会的な娯楽や言語、談話に快楽が見出される上に、このすぐれた協調や統合を続けていく必要性も明らかなのだから、こうした種類の感覚を全く持っていないこと、つまり、国や共同体といった共通のものに対する愛を全く抱かないことは、自己保存の最も明快な手段と自己充実の最も必要な条件の両方を感じ取れないことに等しいと言える。

どうして人間の知力がこの道理に迷い、政治的な統治と社会を一種の発明や技術の産物とみなしてしまうのか、僕にはわからない。［70］僕自身の考えでは、この群れる原理や連合する傾向というのは見たところ大半の人々にとって自然本性に適った力強いものであり、それだからこそ、この〔原理による〕情念が激しくなることで人間社会一般にそれだけ大きな無秩序が発生することもすぐに納得できてしまう。

普遍的な善や世界一般の利益といったものは、ある種の広遠な哲学的対象だ。あのように広大な共同体は簡単に目に入るものではない。同じように、国民の利益、つまり人民や政治体の全体にとっての利益も容易に理解できるものではない。より小さな集団においてなら、人々はお互いに親しく交わり、知り合うことができるだろう。そこでなら人々も社会をよりよく味わえるようになり、より密集した公共体における共通の善や利益を享受できるようになるだろう。そのような人々は、自分のいる共同体の全範囲を見渡して、自分たちが何に奉仕しているのか、自分たちがいかなる目的のために連合し結託しているのかを見知ることだろう。すべての人はこの結合する原理の生まれつきの分け前をもっている。［71］きわめて生き生きと働く活発な能力の持ち主はこの原理についてもそれだけ大きな分け前を手にしているが、正しい理性によってうまく導かれないかぎ

り、その分け前も政治体の全体に及ぶほどの広遠な領域に自分の出番を見出すことはない。というのも、そこで奉仕する相手は千もの部分をなしていて、およそ一目で知られるようなものではないからだ。目に見える結束や厳粛な同盟が形作られているわけではなく、むしろ連結しているのは役柄も階級も身分も異なる人々だ。その連結も感じられるものではなく、観念上のものであって、「国家」や「コモンウェルス」といった一般性の高い見方や考え方に沿ったものだ。

つまり、社会的な目標はある程度の視野がなければ妨げられてしまう。この広い領野の中では、近しい共感や結託する美徳も道標がないと迷子になりがちだ。また、そのような情念が最も強く感じられ、最も生き生きと発露する場面は陰謀や戦争の渦中であり、周知の通り、そうした場面では最高の素質を備えた人がこの手の情念を最も積極的に発揮することも珍しくない。[72] というのも、最も気高い精神の持ち主とは、誰よりも結合しやすく、協働することに誰よりも喜びを覚え、（こう言ってもよければ）連携する魅力を誰よりも強く感じる人のことだからだ。

戦争はあらゆる物事の中で最も野蛮なものに見えるが、その戦争が最も英雄的な精神の持ち主の情念を捉えるというのは想像するかぎり奇妙なことだ。だが、仲間関係の絆が最も身近になるのは戦争中のことなのだ。戦争中には、お互いへの支援が最も多く与えられ、お互いの危険が最も近く迫り、共通の感情が最も強く発露し発揮される。というのも、英雄精神と人間愛はほとんど同じ一つのものなのだ。しかし、この感情が少し間違った方向へ導かれるだけで、人間を愛する者は略奪者へ変わり、英雄や救世主は抑圧者や破壊者へ変わってしまう。

こうして人々の間に新しい区分が生まれる。こうして平和と政治的統治の道に党派に対する愛が生まれ、結社による下位区分が生まれる。[73] というのも、扇動とは国家の内部ですでに始まっているある種の領土分割なのだ。社会が広大に膨れ上がっている場合、領土分割は自然に生じる。そこで強大な国家は、自宅の中に喧嘩部屋を設けたり、離れた国々に領地を広げたりするよりも、国外への植民として人々を送り出すことに利点を見出す。広大な帝国には不自然な点が多

くあるが、特に不自然なのは、帝国としてきわめてよく構成されているにせよ、このような統治形態の中で多数の人々の事柄がごく少数の人々に任されている点だ。為政者と人民の間の関係が感じられなくなり、ある意味では失われている。手足の個々の部位が互いに隔たっていて、頭からも離れているために、その手足が身体のお荷物になってしまっているわけだ。

このような身体の内部では、激しい党派争いが起こりがちだ。連合の精神は、運動が足りなければ新しい動き方を生み出し、広い活動の場所がなければ狭い活動領域を探すようになる。[74] こうして「車輪の中の車輪」が出来上がる[(6)]。いくつかの国制では（政治の不条理だが）帝国の中の帝国が出来上がっている。一体化することは何よりも喜ばしいことだ。〔だからこそ、〕多くの種類の区別が発明されてしまう。さまざまな宗教団体が形成されてしまう。階級が立ち上げられ、各階級の利益が最大の熱意と激情をもって信奉されてしまう。この手の創始者や支援者に事欠くことはない。この不正な社会的精神が抱かれると、別々の社会を作った構成員たちが驚くべき所業を実行するようになる。こうして、人間一般の社会とも国家の実益とも対立するように様々な社会が形成されることからも、人間の連合する素質はきわめてよく証明されることになる。

要するに、党派争いの精神は、その大部分が、人間の自然本性に適った社会的な愛情や共通の感情が誤用されたり不規則に働いたりしたものに他ならないように思える。[75] というのも、社会性の反対は利己性だからだ。そして、あらゆる性格の中で、徹底して利己的な性格の持ち主は、党派に与することに一番消極的だ。この手の人々は、この点では本物の中庸の人になる。彼らは、自分の気質を信じていて、かなり自制が効いているから、一つの主張に熱心に肩入れしたり、一つの側の党派に深入りしたりすることがない。

（友よ！）君も耳にしたことがあるだろうが、「この世を支配するのは利益だ」という月並みな格言がある。とはいえ、僕が信じるに、この問題を念入りに調べてみれば、情念や気分、気まぐれ、熱意、党派心その他のバネが千個は存在して

いて、これらが自己利益に対抗しながら、この〔世という〕機械の運動の大部分を占めていることは誰にでもわかるだろう。この機関の中には、想像以上に多くの歯車や分銅が存在する。[76] これは複雑な種類の機関だから、単一の見方に収めたり、一語や二語で完結に説明したりすることはできない。このメカニズムの研究者が最も低次の最も狭い範囲の運動だけを見て、それ以外の運動を見逃すとすれば、その研究者の眼差しはかなり偏っているに違いない。この時計仕掛けについての図面や解説を広げる際に、善良で広範な感情の側に動くような歯車や天秤は一つとして認めてはならないとすること、つまり、何一つとして優しさや寛大さからなされたとか、純粋で善良な本性や友情、何らかの種の社会的感情や自然感情からなされたと理解すべきではないとすることには無理がある。

とはいえ、（友よ！）君に期待してほしくはないのだけれど、ここで僕が情念の図式を描いてみせることはないし、その系譜や血縁を示して、情念同士がどのように織り合わされ、どのように僕らの幸福や利益に関与するのかを示すつもりもない。[77] 正しい模型を組み立てて、この建築物の秩序の中で友好的な自然感情がどのような均衡を担っているかについて、君が正確な見方で観察できるようにするなんてことは、こういう手紙の性質や範囲には収まらないからね。

僕の知るかぎり、現代の細工人たちはこういう自然な建築材料を躊躇なく手元から片づけ、もっと画一的なやり方で建設を進めたがるだろう。彼らは空想をたくましくしながら人間の心を組み立て直し、その中のあらゆる運動やバランスや重量を冷静で計画的な利己心という一つの原理ないし基礎に還元しようとしている。どうやら、自然本性に裏をかかれて欺かれ、自分の目的ではなく自然本性の目的に奉仕させられるのは、人間たちにとって嬉しいことではないらしい。[78] そうやって自分自身から引っ張り出されて、自分なりに自分の真の利益だと思っているものから追い出されるのが恥ずかしいのだろう。

いつの時代も心の狭い哲学者というべき人々がいて、彼らは自力で自然本性を征服することで、〔自分と本性の間にある〕この差異を矯正しようと考えてきた。彼らの初代の父親にして創始者であった人〔エピクロス〕は、この自然本性の力

をよく見抜いていたため、自分についてくる人々には子供をつくったり国に奉仕したりしないよう本気で勧めていた。どうやら、自然本性を相手にすることはなかったが、その道には魅惑的な対象が立ちはだかっていたようだ。彼が見抜いたところでは、親族、友人、同国人、法律、政治体制、秩序と統治の美しさ、社会と人類にとっての利益といったものは自然本性によって力強い感情を生み出すものであり、その感情は単なる自己という狭い基盤に支えられたいかなる感情よりも力のあるものだった。［79］それだからこそ、結婚すべきではないし、公共の事柄にも一切関与すべきではないという彼の助言は、賢明であり、彼の狙いに合ったものだった。この哲学に本当に弟子入りしたければ、家族や友人を離れ、国や社会を離れてこの哲学に固執するしか道はない――もしそうすることで幸せになれるなら、そうしない人がいるだろうか――しかし、当の哲学者自身は自分の思想を僕らに伝えるだけの優しさを備えていた。これこそ、彼が人間に抱いていた父親としての愛情の証だ。

父よ、事物の解明者よ！あなたが我らに
授けるのは父としての教えだ！ (7)

一方で、後世に現れたこの哲学の復興者たちは〔その父よりも〕素質が劣るようだ。彼らは自然本性の力についての理解が浅く、名称をすり替えれば事物も変えられると考えたらしい。彼らはすべての社会的な情念や自然本性に適った感情を「利己的な種類のもの」と名づけることで、その説明を済ませようとした。［80］こうして、来訪者や困窮者に対する礼儀や歓待、思い遣りといったものは「より計画的な利己心」だということになった。誠実な心は「より狡猾な心」に過ぎず、誠実さや人柄の良さは「より計画的でよりよく制御された自己愛」に過ぎなくなった。血縁者や子供、子孫たちに対する愛は純粋な「自分とその血筋への愛」になった。しかも、まるでこの計算には全人類が含まれていないかのようだ (8)。すべての人間は植民市へ移住した者同士で交わったかのように、一つの血

筋とされ、近親婚と縁組で結び付けられる。すると、祖国に対する愛も人類に対する愛もまた「自己愛」だということになる。大胆さや勇気もこの普遍的な「自己愛」の変化形だということに疑いの余地はない。というのも、（現代の哲学者〔ホッブズ〕が言うには）勇気とは「恒常的な怒り」のことだからだ[9]。つまり、（機知に富んだ詩人〔ロチェスター伯〕が言うには）「挑みかかる人間はみな臆病者」だそうだ[10]。

この哲学者と詩人の方こそ臆病者だと認めることにおそらく異論はないだろう。［81］彼らは彼らなりに知識を振り絞って語ったのかもしれない。とはいえ、本物の勇気というものは、怒りとはほとんど無縁であって、この〔怒りの〕情念が極まったときには、常にその情念に対して一番強い疑いをかけるものだ。本物の勇気は冷静で落ち着いたものだ。最も勇敢な人々には〔誰かを〕残忍にいたぶるような傲慢さなど少しもなく、危機に際しては誰よりも晴れやかで心地よく自由な人々になる。僕らの知っている通り、臆病者だって激怒すれば我を忘れて闘うことができる。だが、憤りや怒りからなされることが勇気の証とされることは決してない。そうでなければ、女性は一番しっかりした性だと語られても良いだろう。なぜなら、これまで彼女たちの憎しみや怒りは、一番強く、一番長いものだということが言われ続けてきたからだ。

〔今触れた哲学者と詩人の〕他にも、もっと次元の低い著者たちがいる。彼らはこの種の機知の流通業者かちょっとした小売業者といったところで、目的もないままに、この「自己愛」という品物を変形させたり区分したりしている。［82］同じ思想が百通りにも展開され、様々な標語や仕掛けに落とし込まれることで、「利害関心のない寛大な行いをいくらやっても、その根底にあるのはやはり自己であり、それ以外には何もない」という謎かけが打ち出される。さて、この紳士たちは言葉遊びを大いに楽しみつつも、定義と格闘する気はないらしいが、もし彼らが「自己利益」とは何かを論じ、「幸福」や「善」を定義することになったら、この謎めいた機知にも終わりが来るだろう。というのも、「幸福は追求されるべきであり、事実として常に追い求められている」という点については僕ら全

員が同意するだろうが、果たして「幸福の在り処が自然に従うことや共通の感情に道を譲ることのうちにあるのか、あるいはむしろそのような感情を抑圧し、あらゆる情念を私的な利益、狭い意味での自己本位の目的、単純な命だけの保存へと向かわせることのうちにあるのか」という点は僕らの間でも討論の続いている問題だからだ[11]。［83］つまり、問題となっているのは「自分を愛しているのは誰で、愛していないのは誰か」ということではなく、「最も正しく、最も真理にかなった仕方で自分を愛し、自分に尽くしているのは誰か」ということなのだ。

正しく利己的になることが知恵の極みであることは間違いない。命が良いものであるかぎり命を愛するということは勇気であり、分別でもある。一方で、惨めな命を繋ぐことは賢人の望むところではない。誠実さがないということは、結果的に、自然本性に適った感情や社会性の一切がないということだ。そして、自然本性に適った感情や友情、社会性が伴わない命は、試しに生きてみれば惨めなものだと気づかされるだろう。「自己利益」というものは、こうした心情や感情が内在的に備えている価値や値打ちに応じて評価され見積もられるべきだ。一人の人が自分自身であるのは、その人の持つ気質、つまり、その情念や感情の性格があるからである。もし人が自分の情念や感情において雄々しく値打ちのあるものを失えば、その人は記憶や知性を失うときのように自分を見失っていくだろう。［84］悪事や卑怯な行いに一歩足を踏み入れるだけで、一つの命の性格と価値が変わってしまう。何が何でも命を保存しようとする人は、他の人には及ばないような酷さで自分を粗末にすることになるはずだ。実際、〔自分の〕命が尊いものでなくなったときに、悪人として生き長らえることを拒み、浅ましい行いよりも死を選んだ人は、その取引を通して得をしてきた。

（友よ！）君は教育を受けていた頃に今日の哲学や哲学者にはほとんど触れなかったわけだが、それは君にとって良いことだ。優れた詩人や誠実な歴史家がいれば、紳士に必要な教養は十分に手に入る。学者気取りはこの手の作家たちと向き合うと、注解者たちの書物を何冊も参考にして必死で読もうとするのだが、同

じ作家たちを気晴らしに読んでいる紳士の方が彼らの感覚を正しく味わい、彼らをよりよく理解するだろう。僕の認識では、昔は良家の青年たちを哲学者たちのもとへ送って育ててもらうという習慣があった。［85］名門出身の弟子たちは、哲学者たちとの交流や、哲学者たちの教えと手本を通して、辛苦に身を慣らし、節度と自己否定のきわめて厳しい道のりを進むよう鍛えられた。そうした幼いころからの訓練を通して、彼らは他の人々を統べるにふさわしい人物となっていった。彼らは戦争の中では祖国の名誉を守り、国家の中では賢明な支配を行い、繁栄と平和の時代には奢侈や腐敗と闘った。このような技術が一つでも大学の教養に含まれていれば、それは結構なことだろう。しかし、昨今の世の中に成立している一部の大学については、そうした目的をうまく達成しているようには見えないし、この世における正しい実践や人と物についての正しい知識を身に着けさせるのが得意な場所とも思えない。仮に君が学校の教える倫理学や政治学で鍛え上げられていたなら、僕も「共通の感覚」や「人間への愛」について君へ書き送ろうなんて思いもしなかっただろう。僕は「甘美にして品格ある」という詩人〔ホラティウス〕の言葉も引用しなかっただろう[12]。［86］そして、君の性格を描くことになっても、この詩人がその友にしたように、君の性格をこの言葉で飾ることはなかっただろう。

彼は大切な友と
祖国のためならば死をも恐れない[13]。

この頃の哲学は、「皮には皮を、と言います。人は自分の命のためならすべてを差し出すでしょう」と語った腕の立つ詭弁使い〔サタン〕の後を追いかけている[14]。命というものを快感の数と鋭さで測ることこそが正統な神学にして健全な哲学だという人たちもいる。彼らはそうした快感を絶えず無味乾燥な美徳や誠実さと対比している。このことを踏まえた彼らは、命を賭けている人たちやそうした快感のどれかを捨てている人たちを「愚か者」と呼んでしかるべきだと思って

いる。その例外があるとすれば、〔命や快感という〕同じ貨幣で支払いが戻ってきて、おまけにそれなりの利益がついてくるという条件があるときだけだ。［87］つまり、僕らは美徳を学ぶために利子に頼り、賢明な人なってよく生きるために、命の価値と感覚的な快楽の価値を持ち上げるというわけだ。

一方で、（友よ！）君はこの点についてしっかりしているね。君は死を痛ましいこととばかり思う人ではないし、自分の誠実さのために何かを賭けて失うとき、それを悔やむ人でもない。むしろ君は、今触れたような格率を笑い飛ばし、流行の道徳家たちの語る改良された利己心や哲学的な臆病さ〔といった考え〕を気晴らしの種にしてしまえる人だ。君は彼らの尺度で命を評価したり、彼らがしているように、「誠実さ」を貶めてそれを名ばかりのものにしたりするような真似をしない。この〔誠実さという〕物の中には流行や喝采では片づけられない何かがあること、その「価値」や「立派さ」というものは実体のあるものであって、想像や意志によって変わるものではないこと、そして、人から見られずにそれ自体のために行為するときも、人に見られながら行為し、世間全体から喝采されるときも、その「名誉」は変わらないことを、君は確信しているのだ。

［88］例えば、紳士らしい風貌の人が、僕に向かって「誰もそばにいないとしたら、体が臭くならないようにするべき理由が私にあるだろうか」と尋ねてきたとしよう。僕が最初に確信することは、そんな質問のできる当の紳士が大変体の臭う人物だということ、それから、そんな人に本当の清潔さなるものを認識させるのは難しいということだ。とはいえ、彼に簡単な答えを返しておくのも悪くはないだろう。つまり、僕はこう言うのだ。「自分の鼻があるからでしょうね。」迷惑なことに、彼がさらにこう尋ねてきたとしよう。「私が風邪を引いていたらどうかね。それか、私が生まれつき繊細な嗅覚のない人だったらどうかね。」僕はこう返すだろう。「臭っていそうな自分を目にすることも、そういう状態の自分を他人に見られることも気にしないということですね。」と返すだろう。「しかし、もしそれが暗闇の中だったらどうかね。」そうだな、たとえ僕に鼻も目もなかったとしても、この事柄に対する僕の感覚は変わらないだろう。僕の本性が

きっと「汚らしいもの」という考えに至るだろうし、そうでないなら、僕は惨めな本性の持ち主ということになる。そうなれば僕は一匹の獣となってしまった自分自身が嫌になるだろうね。自分の身に備えているものに対する感覚や一人の人間としての自分にふさわしいものに対する感覚がそれほどのものにすぎないとすれば、そうした自分自身に名誉を認めることなど僕にはできない。

僕はこれと同じ調子の問いを何度も耳にしてきた。「人には暗闇で誠実であるべき理由があるだろうか。」こういう問いを出す人がどんな人であるかは言わないでおこう。ただ、誠実であるべき理由として絞首台や牢獄に対する恐怖心よりもましな理由を抱いていない人たちがいたとして、正直、僕がその人たちと仲間になったり親睦を深めたりすることはないだろう。例えば、僕に後見人がいて、彼が保護の務めを果たし、大人になった僕へ僕の持つべき土地を返してくれたのだが、彼がそうしたのは自分の身に起こるかもしれないことへの恐怖心からだったとしよう。それでも、当然ながら僕からは礼節をもって彼に接し続けるべきだろう。［90］しかし一方で、彼の価値に対する僕の意見は、ピュティアの神〔アポロン〕がある信者に対して抱いた意見と同じようなものになるだろう[15]。その信者とは、アポロンに対して心の底から恐怖心を抱いたために、自分が〔借り受けて〕手元に置いたままにしていたものを友人へ返した人のことだ。

> 彼が返したのは道徳からではなく、恐怖心からであった。しかし、
> 彼は神域で受けた宣託が全くかの神殿にふさわしい真実のものだと証明した。
> すなわち、子孫や家門と共にみな滅んでしまったのである[16]。

僕も、純粋に謝礼を目当てにした公共奉仕が多いことや、その中でも密告者が重宝され、時として国家から年金をもらう身分になることはよく知っている。とはいえ、僕としてはその手の紳士たちの立派さについては几帳面に考える許しを請わなくてはならない。そして、僕が尊敬を向けるのは、僕が尊敬を向けたいと

思うのは悪事を自発的に解明しようとする人や祖国の利益を心から実現しようする人だけだ。［91］この点からいえば、国家に関わる大犯罪者や集団をなしている共謀者たちが罪状を問われ、処罰を課されるとき、そうした重大な告発が一人の私人としての誠実な熱意と公共的な感情から成し遂げられるとすれば、これ以上に偉大で高貴なことはないと思う。

それから、純然たる俗物の人々にはしばしば絞首台のような矯正道具を見せてやる必要があるということも知ってはいる。しかし、僕は、自由人の教育を受けた人や普通の誠実さを備えている人が、悪人にならないよう自制しやすくするために、心の中でそうした〔絞首台のような〕観念に頼る必要があるとは信じていない[17]。それから、もし一人の「聖者」の備えた美徳が、より遠い世にあるにせよ、同じ賞罰という対象が彼の中に生み出したものに過ぎないとしたら、彼がそこから誰の愛や尊敬を手に入れられるのか、僕にはわからないし、僕だったら、そのような人が自分の愛や尊敬に値するとは全く思わないだろうね。

［92］「盗みを働いたことも逃亡したこともありません」と私に言う
奴隷がいたなら、「褒美として鞭打ちはなしにしよう」と伝えよう。
「人を殺したこともありません。」「磔台で烏の餌にならずに済んだな。」
「私は善良で立派です。」サベッリー人は首を振って否と言う[18]。

僕がからかいを擁護しているときも真摯であり、からかいを使うときも素面を保つことができるという点について、ここまで来れば（友よ！）君は納得してくれるかもしれないし、僕はそう期待しているよ。ユーモアというものは自然本性が僕らに授けてくれたものだが、ユーモアの調整や制御を学んで、これを悪徳に対する痛みの少ない治療薬や、迷信や憂鬱な妄想に対する一種の特効薬にしていくということは、実際、一つの真剣な研究と言えるものだ。「あらゆる物事を笑いものにするためにはどうすべきか」という探究と、「あらゆる物事のうちでどれが笑われてしかるべきものなのか」という探究は全く違うものだ。［93］とい

うのも、笑われるべきものは歪んだものだけであり、からかいを耐え抜くものは麗しくて正しいものだけなのだ。それならば、美しい「誠実さ」がこの武器を使うとき、その切っ先が決して当の誠実さ自身に突きつけられず、むしろ誠実さと対立するあらゆる物事に突きつけられるのだから、そのような誠実さにこの武器を使わせないという考えはこの世で最も認めがたいものになるだろう。

イタリアの道化師たちがこの点について規則を示してくれる存在だとするなら、彼らが教えてくれるのは、彼らの極めて低級で口汚い機知の中で一番受けの良い標的が「卑怯さ」と「強欲さ」という情念だということだ。本物の「勇敢さ」や「寛大さ」を笑いものにできるものならやってみろ、と世間に挑みかかってみてもいいくらいだ。それから、先の二つの性格の人物と同じくらい笑うべきものとして、大食らい、つまりただの放蕩家というのもいる。乱されることのない「節度」を軽蔑の対象にできる人がいるとすれば、その人の方こそ誰よりも見苦しく軽蔑に値する人間であるはずだ。［94］さて、この〔勇敢さ、寛大さ、節度という〕三つの素材から有徳な性格の人物が、その反対の〔卑怯さ、強欲さ、放蕩という〕三つの素材から低劣な性格の人物が出来上がるとしよう。こうしてみると、誠実さを茶化すということが果たして僕らにできるだろうか――両方のあり方を笑うというのはナンセンスだ。笑いが暴飲や強欲さ、卑怯さに向けられるなら、お馴染みの結末が待っているだろう。しかし、どんな機知を駆使しようが、知恵を笑いものにし、誠実さや作法の良さで笑いを取ろうとする人がいるなら、その人こそ大いに笑いものにされるべきだろう。

何者であれ、徹底的に育ちの良い人ならば、粗野な行いや残忍な行いはできない。この点について、そういう人は思案などしない[19]。つまり、自分の利益や利点という思慮をめぐらせた規則に従って物事を考えることはない。育ちの良い人の行いは自分の本性から、言わば必然的に、反省に頼らずになされる。もしそうではないとしたら、その人が場面を問わずに自分の性格に応えること、つまり、本当に育ちの良い人と認められることは無理だろう。［95］誠実な人についても同じことが言える。誠実な人は、あからさまな悪事に対して思案などしない。

「大金」など誘惑にもならないだろう[20]。誠実な人は自分のことを深く気に入り、愛するものだから、共同体から略奪した巨額の金銭を「大金」と呼んでいるような腐敗した悪党たちの誰かと心を交換することなどできないだろう。心の自由を享受し、本当に自分の所有者となった人は、邪悪なものや卑劣なものへ落ちぶれようなどとは考えもしないはずだ。反対に、心の落ちぶれた人は「雄々しさ」や「決意」、「価値」、「自分自身や他の人たちによる評価」といった思想から離れなくてはならない[21]。これらの享受や利点を、放縦な原理がもたらす特権と一緒に手に入れようとすること、つまり、悪人の心を相棒にしながら社会と自由な心を享受しようと企むことは、自分のケーキを食べてしまった後でそのケーキを泣いてせがむ子供のやり口と同じくらい笑うべきことだ[22]。［96］不誠実について思案し始め、不誠実が自分の魂胆とそれほど対立しないことに気づいた人たちは、「良い値段のつく良い悪事をためらうべき理由があるだろうか」と悪賢く問うだろう。彼らは子供と同じで、「ケーキは食べたら取ってはおけないんだよ」と諭されなくてはならない。

たしかに、悪人として仕上がった人たちは、自分のケーキを泣いてせがむという地点を通り越したところにいる。彼らは自分自身のことを知っているが、人々からも知られている。この手の人々は、妬まれもしなければ崇められもしない。僕らとしても、中くらいの悪人の方がまだましだと思うだろう。とはいえ、僕らに見識があるならば、僕らはむしろ次のような考え、すなわち、「現実としては、幸福をめぐって誠実な人と競い合える者がいるとすれば、この徹底して悪人になり果てた人、自然本性に反して完全な悪党になった人だけだ」という考えに行き着くだろう。真の利益は誠実な人だけのものか完全な悪人だけのものかのどちらかだ。その間にあるものは、揺れ動く心、優柔不断、自責の念、苛立ち、そして癇癪だからだ。つまりそこには、熱いものから冷たいものへ、一つの情念から正反対の情念へという、不和の絶えない人生、代わる代わる現れる胸騒ぎと自己嫌悪しか存在しない。［97］安らぎや憩いというものがあるとすれば、それは考え抜かれて固く定まった一つの決意の中にしかない。一度胸にした決意は、勇気を

もって貫かなくてはならない。さまざまな情念や感情をその決意に服従させなくてはならないし、気質や性格を鉄のように固くして、気質が心を背負い、性格が判断を背負っていけるようにしなくてはならない。このことは〔誠実な人と悪人の〕双方が同意するところであり、それ以外の全てのあり方は動揺と困惑に終わる。だから、「一回だけなら、このちょっとした悪事をしても、このたった一つの裏切りを犯してもいいじゃないか」と真剣に自問することがあるなら、それはこの世で一番笑うべき想像であるし、「共通の感覚」にも反するだろう。というのも、普通の誠実な人に自分で考えさせて、その利益を説いてくる哲学や些末な推論に邪魔されないようにしてやれば、その人は悪事について一つの答えしか出さないだろう。つまり、悪事に手を染めようとか、悪事に対して抱く自然な嫌悪を抑えようという考えは心に全く浮かばないのだ。そして、これは自然本性に適った正しいことだ。

［98］真実を言うと、道徳について今の世の中で通用している考えでもあるが、誠実さにとって得になりそうな哲学や深遠な理論は存在しない。つまるところ、共通の感覚に踏みとどまって、その先へ進まないのが一番なのだ。一般に、この問題については、人々が最初に考えることの方がその後に考えることよりも優れている。つまり、人々が本性から抱いた考えの方が、研究や決疑論者の助言を通して磨かれた考えよりも優れている。普通の感覚と普通の言い方によれば、「誠実が一番の得策」というわけだ。これに対して、〔理論で〕磨き上げられた感覚によれば、この世には極悪人以外に物の分かった人物はいないとされる。そして、自分の情念に従い、自分のだらしない欲求や欲望を野放しにしている彼らこそが自分に従っていると考えられている――どうやら、こんな人物が「賢人」であり、こんな考えが「この世の知恵」だと言いたいらしい！

普通の人が下劣な行いについて語るとしたら、共通の感覚に従って、自然本性に即して心から「世界の全てが手に入るとしても、そんなことはしたくない」と言うだろう。［99］一方、理論家たちは、この言い方に大いに修正すべき点を見つけ、多くの抜け道、多くの救済策、多くの痛み止めを見つけ出す。見事な贈り

物が正しく渡され、正しい手順で許しが請われ、見事な救貧院といった慈善による建物が正しい信奉者たちのために築かれ、正しい信条のために十分な熱意が示されたなら、一つの不正な実践は十分に埋め合わせられる。とりわけ、その不正な実践が人の中に（彼ら曰く）「善なる行い」をし、「真なる信条」に仕えるための大きな力をもたらすときはそうだとされる。

このことを根拠として、今までにいくつもの見事な領地や高級な地位が獲得されてきた。同じようにして、王冠が買い取られることも何度かあったし、（僕の勘違いでなければ）古代の皇帝たちの中には、これと似たような原則に沿って大きな支援を得た者もいたし、そうした皇帝たちの側でも、自分を支援した主張や派閥に対して恩を返し忘れることはなかった。［100］この手の道徳の偽造者たちはたっぷりと稼いできたし、この世もその哲学のせいでかなりの額を支払うことになった。というのも、思い遣りという本来の明快な原則や平和と互いへの愛という単純で誠実な教えが、一種の霊的な化学者によって昇華され、強力な腐食剤へ変えられてしまったからだ。つまり、これらの原則や教えは、彼らの蒸留器を通ってしまったために、互いへの憎しみと敵意に満ちた迫害へと最も激しく向かう精神を生み出してしまったのだ。

とはいえ、（友よ！）僕らのユーモアは、憂鬱な反省へ傾くようなものではない。悪徳をいかめしく非難する人たちには、彼らの気風や性格にぴったりのやり方でやらせておけばいい。いつか彼らの仕事が彼らに許された権威的なやり方で成功したら、喜んでお祝いしよう。〔ただし〕それまでは、彼ら以外の人たちが愚かさを笑いものにし、知恵と美徳を（もし可能なら）愉快で陽気なやり方で奨励することも認められるはずだ。［101］詩人たちのように主に自分や他人を楽しませるために物を書いている人たちにも、この特権が認められるはずだ。もし常備軍のような改革者の方々に「自分たちは上流の紳士に受けが悪い」という不満があり、さらに、笑いの中に逃げ込んで守備を固めつつ、その方面から効果的に襲撃を仕掛けてくる軽薄な文人たちに対しても声高に反撃したいのであれば、

この〔知恵と美徳という〕主義のための志願兵に他ならない人々に対して、同じ種類の土俵でフェアな試合を行うというただ一つの条件の下、自前の武器で敵と交戦し、進んで同じ攻撃に身を晒すことを禁じる理由があるのだろうか。

僕の理解では、「上流の紳士」とは、生まれつきの優れた素質や優れた教育の力によって、本性として品格がありふさわしいことに対する感覚を身に着けている人たちのことだ。［102］ある人は純粋に生来の本性によって、またある人は技術と訓練によって、それぞれ音楽を聴く耳や絵画を見る目の肥えた人となり、身の回りの物の美点美質についての嗜好、あらゆる種類の均衡に対する判断力、世の中の才気ある人々に楽しみや喜びをもたらす事柄の多くに通じる趣味を備えた人となる[23]。ためしにこの手の紳士たちに好きなだけ行き過ぎたことをさせ、道徳的な規則破りをさせてみよう。そのとき彼らは、自分の矛盾に気づきながら、自分と仲違いして生きることになる。つまり、自分の最高の喜びや楽しみを下支えしている原理に反して生きることになるはずだ。

愛好家が追い求め、詩人が褒め称え、音楽家が歌い、建築家や画家が描いたり形にしたりするあらゆる美しさと比べても、本物の命とさまざまな情念から引き出されたものこそが、一番喜ばしい美しさ、一番心が惹かれ震える美しさだ。心に響くという点で、心自身からくるものや心の本性に備わるもの、つまり、心情の美しさ、行いの品格、性格の向き、人の心に備わる均衡と容姿に勝るものはない。［103］これは哲学の教えだが、ロマンスや詩、演劇から学べる教えでもある。物語作家はそうした楽しいもので僕らを様々な感情の迷宮へと連れ込み、僕らが望もうが望むまいが、その男主人公や女主人公の抱く様々な情念へ僕らの関心を惹きつける。

——締めつけ、
駆り立て、宥め、偽りの恐れを吹き込むのだ
魔術師のように[24]。

もしできるものなら、詩人のような調和を知る人たちに、この自然本性の力を拒み、この道徳の魔術に逆らうようにさせてみよう。この手の人たちは、この魅力の分け前に二重に与っている。第一に、彼らを感化する当の情念の正体は、調子や品性、均衡といったものに対する愛だ。この情念もまた、狭い意味での愛、つまり利己的なあり方をした愛ではなくて（自分のために創作する者がいるだろうか）、友好的で社会的な視野を備えた愛であり、他の人たちにとって快いものや良いものに対する愛、果ては子孫や未来の世代にとって善いものへの愛だ。［104］そして第二に、この実演家たちを見れば明白だが、彼らにとっての一番のテーマと主題となるもの、すなわち、彼らの才気を最も高め、そのおかげで彼らが他の人たちを最も効果的に感動させられるようになるものは、もっぱら作法、すなわち道徳的側面にある。というのも、彼らの芸術の効果、彼らの芸術の美しさとはすなわち、「音節と音声からなる言葉の拍子の中で、内面的な種類の調和や調子を表し、人間の魂の美点を描くと共に、適切な引き立て役や対抗相手をその肖像の装飾として役立て、様々な情念からなるその音楽をより力強く魅惑的にすること」にかかっているからだ。

麗人の〔容姿の〕美しさを賛美する人たちであればおそらく、自分が恋する相手の「道徳的側面」などと耳にしたら笑うことだろう。しかし、心をめぐってどれだけ胸騒ぎが起こるか！様々な心情や情緒を知ろうとする詮索がどれだけなされているか！［105］ユーモアやセンス、機知の機微といった、恋愛愛好家たちが褒め称えてやまない様々な心の装飾が、どれだけ称賛を集めているか！この問題の決着は彼ら自身につけてもらうことにして、彼らの気が済むまで、これらの多様な美しさ同士がなす均衡を整えさせてみよう。そうすれば、彼らも心の美しさが存在すること、そして、この〔恋愛という〕場面においてはこの種の美しさこそが欠かせないということを認めざるを得なくなるだろう。そうでなければ、一目惚れした恋人に対し、愚かな雰囲気を漂わせているというだけで幻滅するようなことがなぜ起こるのだろうか。あるいは、体つきが整っていて、顔立ちや顔色が綺麗な人において、知性を欠いた様子や作法がそのあらゆる外見的な魅力の

効果を打ち消し、当の麗しき人からその力を奪ってしまうようなことがなぜ起こるのだろう。美しい人の実質をなす堅固な部分として僕らが喜んでいるものが何なのか想像してみるのもいいだろう。この主題をよく批評してみるなら、おそらく、僕らが最も感動するものがたとえそれが外面的な容姿のあり方に存するとしても、それはやはり気質に備わる内面的な何かの神秘的な表現にしてある種の影だということがわかるだろう。［106］僕らは、威厳のある風格や活発な見た目、女傑めいた勇ましい佇まいに胸を打たれたり、あるいは反対に柔らかくて優しい佇まいに胸を打たれたりするが、そこで僕らに一番働きかけているものはそうした性格や性質についての想像だ。僕らの想像力は、心を楽しませ感動させるようなこの種の美しい姿や像をせっせと形作るのであり、それは他の情念が別の方面に向かっていても変わらない。下準備としての言い寄ること、告白すること、解き明かすこと、確信すること、疑いが晴れること、それから、何か相互的なもの、何かお返しのように感じられるものを当てにすること、つまりは「両想いへの軽率な期待」、こうしたものはみな色恋沙汰に必要な原材料であり、この情熱の道で気品と技量を磨いた人たちからもお墨付きを得ている[25]。

彼らよりも情念が落ち着いていて、より深く熟慮して物を追い求める人たちも、他の種類の物に宿る美しさの力には抗えないだろう。［107］貴賤は様々だが、誰もが愛好家であり、誰もが何か一種類の「美点」を追い求め、「ウェヌス」に言い寄っているのだ。様々な物事に備わる「美麗さ」や「誠実さ」、「品格」は自らの道を貫くだろう[26]。理知的ないし道徳的な種類のより高貴な対象の余地を認めない人たちも、より序列の低い物事のどこかでその〔美麗さや誠実さの〕支配を知ることになるだろう[27]。行為の第一のバネを無視し、命の全体にある調子や均衡という思想を軽蔑するような人たちも、実際的な技能を研究する場面にせよ、機械的な美しさについてだけ気を遣ったり面倒をみたりする場面にせよ、やはり命の些細な個々別々の点において心を奪われ、夢中になってしまうだろう。家屋や建物、それらに付属する装飾品の設計、庭園やその区画の構想、歩道や植林、並木道の整備など、均整〔に関わる事柄〕は百千とあるが、これらの均整

は、心に宿るより喜ばしくて高尚な均整と秩序の在り処へと続いていく。［108］「麗しい」「高貴だ」「端正だ」といった心象は、百千の場面、百千の対象に姿を見せる。この幻影はさまざまな姿形に取り憑いて僕らをおののかせる。この幻影は、たとえ僕らの冷静な思考から追い払われ、研究室から追い立てられても、宮廷で僕らと再会し、栄華や称号、名誉といった偽りの壮麗さと美しさの夢で僕らの頭を埋め尽くすだろう[28]。僕らはこうしたもののために極上の快楽や安寧を犠牲にする覚悟をしており、またそのために最も浅ましい苦役人や見下げ果てた奴隷にもなってしまうのだ。

この哲学的な美しさを一番馬鹿にしている遊び人たちでも、しばしばその魅力を認めてしまうことがある。誠実さを心から褒めることや気高い部分の美しさに大いに胸を打たれることにかけては、彼らも他の人たちに負けていない。［108］彼らもそうした物事自体には感動するのであり、ただその手段に感心しないだけなのだ。そして彼らは、誠意と贅沢を一致させるために、できれば誠意の方を調整しようとするだろう。しかし、それは調和のルールが許さない。不協和が過ぎるのだ。とはいえ、そうした類の努力を目にするのも不愉快ではない。官能に溺れたいくらかの人たちがあらゆる種類の退廃腐敗を浅ましく弁護している一方で、より気高い他の人たちは誠実さに歩調を合わせようと努力しており、快楽についてより良い理解を持ち、快楽に何かルールを課そうとしている。彼らは「ここまでは正しいが、これ以上は不正だ。この場合は許されるが、この場合は認められない」という風にある作法を咎め、別の作法を褒めるということをしている。彼らは自分たちの娯楽の中に正義と秩序を導入する。彼らは理性を身内に引き入れて、自分たちの暮らしぶりをどうにかして弁護してもらい、何らかの種類の協和や一致に沿って自分たちを形作ってもらおうとする。［110］あるいは、特定の場面でそれが実行できないことを知ると、彼らは気高い振る舞いや規則を備えた言動、一貫した生活と作法といったものがもたらす快楽のために、それ以外の快楽を犠牲にする方を選ぶだろう。

真の人生の調子と韻律を心得る[29]。

この思想は他の様々な場面でも突きつけられるけれど、やはり一番そう思うのは気高い性格の人物がひどく下劣な性格の人物と対比され、立派さをめぐる力強い光景を見るときだ。それだから、風刺詩人たちは、詩人たちの中でも美徳を正当に扱い損なうことが滅多にない人たちだと言える。加えて、より高貴な詩人たちもこの思想を裏切るようなことはしない。現代の文人たちも、武勇と娯楽のことばかり書いてはいるものの、あからさまな悪事が立ちはだかり、その反対物である〔誠実さの〕心象と共に視界に入ったときには、素朴な誠実さの賛歌を情熱的な調子で歌うことができるだろう。

［111］世の中と親友になり、麗人と上手く付き合い、他の美しいものも順調に所有できているとき、僕らはこの〔美徳という〕地味な婦人を蔑ろにしてしまうかもしれないし、そうなるのが物事の常だ。とはいえ、結局、野放図や行き過ぎが自然と生み出すものが何であるかを知り、悪人たちが贅沢という手段に頼り、下劣な利害関心を用いることで栄え、最も誠実な人間よりも最も下劣な人間の方が選ばれていることを知るとき、僕らは「美徳」が新しい光の中で照らされるのを目撃するだろうし、そうした引き立て役のおかげで誠実さの美しさ、つまり、それまでは自然本性に適ったものとも力強いものとも理解できていなかった魅力の実態を識別できるようになるだろう。

つまるところ、この世で一番自然本性に適った美しさとは誠実さ、つまり道徳の真実だ。というのも、美しさは全て「真実」だからだ。真実の顔立ちが顔の美しさを作り、真実の均衡が建築物の美しさを作り、真実の調べが和声と音楽を作る。［112］詩は全て創作された物語だが、そこでもやはり真実がその完成だ。古代の哲学者〔アリストテレス〕とその近代の模倣者たちが劇詩と叙事詩の本性について書いたものを読む力を備えた学者ならば、この「真実」という根拠をすぐに理解するだろう。

素質のある画家であれば、デザインの真実と統一というものを理解しているだろう。その手の画家は、自然へ過度に近寄り、実物を厳密に模写するとき、自分が不自然なことをしていると察する。なぜなら、その技術が作品に落とし込めるのは自然の全体ではなくその一部に過ぎないからだ。しかし、画家の作品も、もし美しいものであり、真実を携えているならば、それ自体として一個の全体であり、完結して自立しており、同時に彼の作り出せるかぎり広大で包括的なものとなるだろう。すなわち、その場合、「見渡すことの容易さ」、すなわち、単純で明瞭な統一された光景を形作るために、様々な細部が一般的なデザインに従い、全ての物事が一番重要なものに属さなくてはならない(30)。［113］そして、何か特異なものや異質なものが表現されると、この心地よさは壊されたり妨げられたりするだろう。

さて、自然の多様性とは、自然の形作るあらゆる事物を特異で根源的な特徴によって区別するものである。そしてこの特徴は、厳密に観察するかぎり、その基体を周りの世界に存在する何ものにも似ていないものとする。しかしこの効果は、優れた詩人や画家が防ごうと尽力しているものでもある。彼らは細かさを嫌い、独特さを恐れている。そうしたものは、彼らの作る図像や人物を勝手気ままなものにしてしまうからだ。実際、純粋な似顔絵画家に詩人と共通するものはほとんどない。むしろ、そうした似顔絵画家は純粋な歴史家に似ており、自分の見たものを写し、一つ一つの特徴や変わった特色を細かく辿っていく。構想とデザインを抱く人たちとなると話は違う。［114］この才人たちは、自然の中にある一つの個別の対象ではなく、むしろ数多くの対象に基づいて自分の作品の観念を形作る。例えば、最良の画家たちは最良の彫刻たちを根気強く研究してきたと言われている。というのも、彼らの知るかぎり、そうした彫刻たちが与えるルールは最も完璧な人体が与えられるものよりも優れていたからだ。同じように、偉大な文人たちも最良の歴史よりも好んで最良の詩を勧めてきた。それも、そうした詩の方が、様々な性格の人物における真実や人間の本性をよりよく伝えていたからだ。

この批評を誇張と考えることはできない。この手の様々なルールで自分を縛っ

ている人は数少ないが、かといってそうしたルールに気づいていない人もほとんどいない。整っていない短命な作品を残した下手な詩人や作家にも何かしら慈悲深いことは言えるかもしれないが、僕らの知っている通り、優れた芸術家たちの名作はより一様なやり方に沿って形作られている。彼らの残した正当な作品は、その一つ一つが均衡と真実という自然本性にかなったルールに当てはまっている。［115］彼らの頭脳の創造物は自然が形成した創造物に似ているはずだ。そこには一つの本体と均衡のとれた諸部分がなくてはならない。あるいは、その作品に頭も尾もないということなら、ごく一般的な人たちでもそれを必ずや批判するだろう。というのも、細部がどれほど面白くて精密であっても、（正しい哲学によれば）共通の感覚は一つの全体において正しさがない作品を次のように判断し、その作者を全体的に言って非常に不器用だと告げるからだ。

> 作品の出来は芳しくない。全体を設けることを
> 知らないのだから[31]。

これこそが詩作の真実であり、（こう言ってよければ）描画の真実、あるいは造形の真実だ。語りの真実、あるいは歴史の真実は高く評価されなくてはならないものであり、この真実を欠くために苦しみを被ってきた人類がその真実に深く関心を寄せるようになった成り行きを思えば、なおさらそうである。この手の真実もそれ自体としては道徳の真実の一部だ。歴史の真実の判定人となるためには、道徳の真実の判定人となることが必要だ。［116］作家の道徳性、性格、気風が徹底して考慮されなくてはならない。歴史家のように、人間にとって重要な物事を物語る人は、何者であるにせよ、僕らに対して多くの仕方で自分の人物を証明しなくてはならない。つまり、歴史家は、僕らがその権威に基づいて何かを受け入れる前に、その判断力と公平さと利害関心の無さを証明しなくてはならない。それに、批評の真実、すなわち、そうした場面で注解者や翻訳家、解説者や文法家が私たちに伝えることをめぐる判断や決定についても触れておくと、この

真実は多様な様式、様々な読み、原典における改竄や欠落、さらには写本家や筆写人、編集者たちの手違いのような、古代の書物が被る百はくだらない事故に囲まれているし、たとえ読者が言語に長けた人であったとしても、〔批評の真実に関しては〕年代学や自然哲学、地理学といった諸学問の助けも色々と借りなくてはならないことを思えば、この真実については精密な思弁に委ねるべき問題ということになるだろう。

［117］つまりは、歴史の真実について正しく判断し、人間の過去の行為や事情について国も時代も異なり、性格や関心も異なる昔の作者たちが書き残したものを正しく判断する前に、いくつもの先行する真実が吟味されなくてはならないのだ。いくつかの道徳的で哲学的な真実はそれ自体として極めて明白であり、そのような自然本性に適った知識、根本的な理性、共通の感覚に反するものを真理として認めることよりも、人類の半数が狂って同一の種類の愚行に様子を想像することの方が簡単なくらいだ。

僕がこのことに言及したのはむしろ、現代の一部の熱心家たちが真実を知ることにおいても真実を判断する作法においても、「鼻を数える」以上のことをしていなさそうだからだ[32]。［118］もし彼らがこのルールに従い、それなりの数の群衆の頭数を揃えることができ、箒に乗った魔女や宙を舞う浮遊体の話を証言するようなランカシャー流の頭や片田舎の頭脳の持ち主の群れや幻視者の集会を生み出すことができるなら、彼らは自分たち自身の新しい超常現象についても確固たる証明を勝ち取ることができるだろうし、その際には「真理は偉大にして勝利するものなり」と叫ぶことだろう[33]。

宗教は間違いなくこうした超常現象を説く人たちに負うところが大きい。彼らは、このような洞察力のある時代にあって、宗教を民衆の伝承という足場の上に立たせようとするだろう。小鬼やゴブリン、悪魔の悪戯をめぐる教区内の言い伝えや噂話は子供たちを怖がらせたり、通俗的な悪魔祓いたちや魔術師たちの活躍の場を作ったりするために発明されたものだが、超常現象を説く人たちは宗教をそうしたものと同じ根拠に託すつもりらしい。というのも、君も知っている通

り、田舎の人々がこの〔魔術師という〕名前で呼び習わしている人たちとは、誠実なやり方で呪術を行い、悪魔を悪魔自身の武器によって挫くような秘儀の取扱業者たちのことなのだ。

［119］さて、（友よ！）僕にも一連の考察を終えるべき時は来た。諸々の物事についてこれ以上詳しく説明するつもりはないが、そうした話題について深く長く語ることになれば、僕はこのユーモアというやり方を離れることになるだろう。一方で、僕が共通の感覚に従い、業界用語に頼らずにそれなりに良い仕方で道徳を勧めていたと君が認めてくれるなら、僕はお粗末ながら自分の実演に満足できるだろうし、これとは違う調子で話したり書いたりしている現代の形式ばった検閲官たちについても、何か彼らを煩わせるようなことを言ってはしまいかと恐れずに済む。君の見た通り、僕はいくつかの場面で自由に笑わせてもらった。もし僕が間違って笑っていたり、見当違いに真剣になっていたりするなら、僕は自分が笑われる番になってもよしとするだろう。もし僕がからかわれても、僕は相変わらず笑っていられるだろうし、それは僕の思想に新しい利益をもたらすだろう。［120］というのも、真実、熱心家の紳士たちが近頃まで知られていたような仕方で武装したとすれば、彼らを駆り立てる激怒や悪意、憤慨は全く笑い事ではなくなるだろう。しかしあれ以来、為政者は彼らの爪を削るように留意し続けているから、〔今では〕彼らと出会ってもそれほど怖いことにはならない[34]。反対に、そういう場面にはどこか喜劇的なところがある。そこで人が思い浮かべるのは、古い建築物の正面や隅石によくみられるグロテスクな怪物やドラゴンの顔だ。この手のものは建物の守護者や支持者としてそこに置かれているわけだが、どれほど険しい表情をしていようと、外部にいる人たちに害を与えることもなければ、内部の建築の役に立つわけでもない。振り絞った怒りがほとんど無益である様子は冗談や笑劇になる。行き過ぎた凶暴さが完全に無能無力である様子こそが最高の笑いを生むのだ。

大切な友へ、心を込めて

注

(1)　本稿は菅谷基「第三代シャフツベリ伯爵『センスス・コムニス：機知とユーモアの自由についての随筆』（上）」、『ICU比較文化』51号、国際基督教大学比較文化研究会、2019年、119−154頁の続編である。

本稿では以下の底本を使用した。The 3rd Earl of Shaftesbury. *Sensus Communis: An Essay on the Freedom of Wit and Humour*. London, 1709. ECCO, Accessed 30 September 2020, [ESTC Number: T047455].

訳文の表記の方針は以下の通りである。（一）イタリックは傍点表記を基本とし、大文字で表記されている場合、（直接話法・間接話法を問わず）引用や台詞として表記されている場合、用語や言葉としての強調が置かれていると訳者が判断した場合などは鍵括弧を用いた。（二）固有名詞および地名全般のイタリック表記は特別に強調されていると判断した場合以外は傍点を付けていない。（三）訳者による補いは亀甲括弧で示した。（四）近世英語の出版物という性質上、古い語義や表現は多数に上るため、『オックスフォード英語辞典』で比較的容易に特定できるものを除き、他の用法と混同され得る用例、あるいは慣用句その他の特殊な表現についてのみ訳注として示した。（五）原典のおおよそのページ数は角括弧と数字にて表記した。

(2)　ユウェナリス『風刺詩』第8歌73-4行。

(3)　この注解者たちとは、アイザック・カソーボン（イザク・カゾボン）、クラウディウス・サルマシウス、メリック・カソーボン、トマス・ガタカーの4人である。このことは、シャフツベリが『センスス・コムニス』を『人間、作法、意見、時代の諸相』（1711年）へ収録する際にこの箇所へ追加した脚注からわかる。シャフツベリはこの4人がマルクス・アウレリウスの「公共心」（『自省録』第1巻）について残した注解や翻訳を参照しており、特にサルマシウスが「公共心」とユウェナリスの「共通の感覚」を同義語としたことを踏まえて議論を展開している。

(4)　ユウェナリス『風刺詩』第8歌71-2行。

(5)　ここの論述で念頭に置かれているのはホッブズの自然状態論と社会契約論である。

(6)　「車輪の中の車輪」は『エゼキエル書』第1章第16節に倣った慣用的表現である。

(7)　ルクレティウス『事物の本性について』第3巻第9−10行。

(8)　「計算」（Reckoning）はホッブズの用語である。『リヴァイアサン』第5章を参照せよ。

(9)　ホッブズが『リヴァイアサン』第7章に残した文面は「突発的な勇気は「怒り」と呼ばれる」（Sudden *Courage*, ANGER.）というものであり、シャフツベリは勇気の話題を展開するためにこの定義を逆転して利用している。

(10)　第2代ロチェスター伯爵『人間の風刺』158行。

(11)　「そのような感情を抑圧し」（suppressing it）は代名詞の読み方によっては、「自然〔本性〕を抑圧し」と訳すこともできる。

（12） ホラティウス『カルミナ』第3巻第2歌13行。

（13） ホラティウス『カルミナ』第4巻第9歌51–2行。

（14） 『ヨブ記』第2章第4節。

（15） ピュティア（Pythia）は古代のデルポイで神託を告げていた巫女のことである。

（16） ユウェナリス『風刺詩』第13歌204–6行。

（17） 「しやすくするために」（the better to）は、「より容易に、あるいはより効果的に」の意味で取った。“better, adj., n.1, and adv.” *Oxford English Dictionary Online*, Oxford University Press, March 2020. 以下、*OED Online*と略記する。

（18） ホラティウス『書簡詩』第1巻第16歌46–9行。高橋宏幸による訳注は、サベッリー人への名指しについて、「古来の厳格な道徳を保持した」民族という前提での言及としている。ホラティウス（著）、高橋宏幸（訳）『書簡詩』、講談社、2017年、83頁、注8。

（19） 「思案」（deliberate）はホッブズの用語。『リヴァイアサン』第6章を参照せよ。

（20） 「大金」（plum）は「10万ポンド」の金額、あるいはより一般的に「富」を指す用法で取った。“plum, n. and adj.2.” *OED Online*.

（21） 「評価」（Character）は「評判」を指す用法で取り、「による」（with）は行為主体を表す古い用法（byと同義）で取った。“character, n.” and “with, prep., adv., and conj.” *OED Online*.

（22） 「手に入れようとする」（affect）は「狙うこと」を表す古い用法で取った。また、「企む」（pretend）は「計画すること」を表す古い用法で取った。“affect, v.1.” and “pretend, v.” *OED Online*.

（23） 「美点美質」（Ornament and Grace）は、美しさによって魅了する性質を表す慣用的表現（Grace and Ornament）の別形とみなして訳した。“grace, n.” *OED Online*.

（24） ホラティウス『書簡詩』第2巻第1歌211–13行。

（25） 「両想いへの軽率な期待」はホラティウス『カルミナ』第4巻第1歌30行からの引用。

（26） 「美麗さ」（the Venustum）は直前の「ウェヌス」（VENUS）からの派生した表現。

（27） 「理知的」（rational）は「心の中にのみ存在し、実際の物理的存在がない」という古い用法で取った。“rational, adj. and adv.” *OED Online*.

（28） 「研究室」（Closet）は「私的な研究や思弁的な思索のための空間」という意味で取った（I.1.c.）。“closet, n. and adj.” *OED Online*.

（29） ホラティウス『書簡詩』第2巻第2歌144行。

（30） アリストテレス『詩学』第7章（1450b34-1451a）。

（31） ホラティウス『書簡詩』第2巻第3歌34–5行。

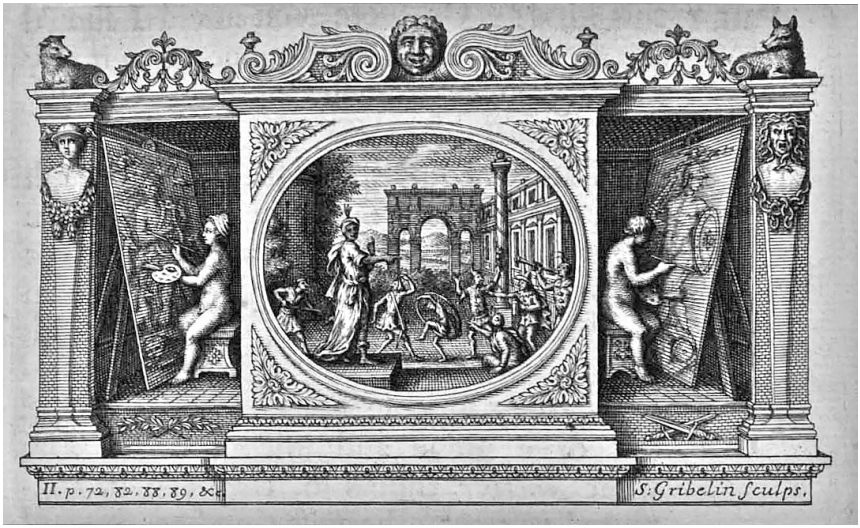
（32） 「鼻を数える」（counting Noses）は「人数を数えること」を指す慣用的な言い回し。“nose, n.” *OED Online*.

（33）「ランカシャー流の発想や片田舎の頭脳の持ち主たち」（Lancashire Noddles, remote provincial Head-pieces）という表現は、仮に近世イングランドで迫害された有名な魔女集団である「ランカシャーの魔女」（Lancashire witches）を念頭に置いたものとするなら、魔女の所業などの超常現象を信じ込んで証言する俗衆という意味合いになるだろう。例えば、シャフツベリがどの程度認知していたかは不明であるが、彼の存命中にも詩人トマス・シャドウェル（1640-1692）が『ランカシャーの魔女たち』（1681）という演劇を発表している。Laura Gowing. “Pendle witches Lancashire witches (act. 1612).” *Oxford Dictionary of National Biography*. Oxford University Press, 2004.

　また、「真理は偉大にして勝利するものなり」は「第一エズラ記」第4章第41節の言葉である。

（34）「激怒や悪意や憤激」を抱えた「熱心家の紳士たち」について言われる「武装しているとして」（were they arm'd）という表現は、（原書の序盤において語られた）「悲劇ぶった紳士たち」は「激怒と憤激」を抱えながら「世俗の腕力」（Selcular Arm）を求めるという論述を修辞的に踏まえたものと考えられる。Shaftesbury. *Sensus Communis*. p. 10.

解説
1714年版の挿絵の構成について



第3代シャフツベリ伯爵（1671-1713）は『センスス・コムニス』を収録した著作集『人間、作法、意見、時代の諸相』を1711年に出版した。その後、彼は亡くなるまでの間に『諸相』の改訂を進め、これが反映された第2版は1714年に出版された。この校訂作業を通して、各収録著作の冒頭に著作の内容を反映した挿絵が追加された[(1)]。この挿絵のデザインについては、シャフツベリが銅版画家シモン・グリブラン（Simon Gribelin, 1662-1773, サイモン・グリベリン）へ伝えた注文の記録が残っており、その記録はシャフツベリ・プロジェクトによって編纂された標準版（Standard Edition）に収録されている[(2)]。本解説ではこの記録に基づき、『センスス・コムニス』に追加された挿絵のデザインを分析する。

この挿絵の図面は、大きく左・中央・右の三つの区画に区別される。第一に、中央の区画のうち、シャフツベリが指示しているのは円形の枠に収まった情景の

内容とその上に飾られた人の頭部である。中央の情景に描かれているのは『センスス・コムニス』で例として用いられている謝肉祭の情景である。そこでは少し高い台に立ったエチオピア人が謝肉祭を盛り立てる群衆を笑い、群衆の一部もまたそのエチオピア人を笑っている[(3)]。また、この枠の上には男の頭部が置かれ、喜劇的な笑いの表情を浮かべている[(4)]。第二に、左の区画で指示されているのは、絵を描く少年と絵の内容、そしてその床側面の装飾、左側の柱、柱の上の動物であり、これは右の枠と左右対称の指示になっている。左の区画の姿勢の良い少年は「自由な表情と自由な雰囲気」を備え、「自由の帽子」（つまりプリュギア帽）をかぶっている[(5)]。彼が描いているのは、獅子や鳥に囲まれてリュラを奏でるオルペウスである[(6)]。彼を囲む意匠としては、床の側面にオリーブの枝が、左の柱に兜をかぶって花飾りを巻かれたメルクリウスが、その柱の上に子羊が描かれている[(7)]。第三に、右の区画の背筋を曲げた少年は、「気品がなく」、帽子をかぶらずに荒れた髪を晒している[(8)]。彼が描いているのは、兜をかぶり剣と盾を携えたマルスであり、その兜の上ではドラゴンが炎を吐いている[(9)]。彼を囲む意匠としては、床の側面に剣が、右の柱に蛇を生やして大きな鎖を巻かれたメデューサが、その柱の上には狼が描かれている[(10)]。最後に、挿絵全体の土台の左側には第二論考である『センスス・コムニス』（IIと表記）のページ数が指示され、右側にはグリブランの署名が記されている[(11)]。ページ数によって指示されている箇所はそれぞれ、言論の自由と笑いの形態の関係（72頁）、エチオピア人と謝肉祭の例（82頁）、人間を「狼」とするホッブズの哲学（88頁）、自由に対するホッブズの嫌悪（89頁）を扱っている。

この挿絵の固有のデザインとして分析されるべきは左右の区画である。なぜなら、中央の区画はページ数に指示された箇所の例をそのまま図像にしたものであるのに対して、左右の区画のデザインは（狼の意匠を除いて）『センスス・コムニス』の本文にない要素から構成されているからである[(12)]。そこで、シャフツベリの指示とグリブランの図像から最初に推測できるのは、この左右の区画を構成する要素がその位置や数、寸法などにおいて釣り合うように置かれており、その構

成の結果として、左右の区画が全体としてお互いに対比的な内容を持つように構想されているということである。左の区画の要素から象徴的な連想の対象を指摘すると、左の区画において、少年の姿は（シャフツベリの注文によれば）「自由」を表している。そして、動物たちに演奏を聞かせるオルペウスと柱に描かれたメルクリウス（ヘルメス）は共にリュラや音楽に関わっている(13)。また、床の側面に描かれたオリーブは平和の象徴である(14)。これに対して右の区画の要素を整理すると、少年は「自由の帽子」をかぶっておらず、これはメデューサに巻かれている鎖とともに自由の欠如を連想させる。また、武装したマルスは戦争の神であり、床の側面に描かれた剣も戦争の表現とみなすことができる。メデューサ自身は見る物を石へと変える目をめぐる伝承があり、力や争い、あるいは自由の喪失といった観念を連想させ得るものであるが、マルスと比べて象徴内容が明確ではない。以上より、左右の区画の対比をなす概念の組み合わせとして明確なものは自由と束縛、そして平和と戦争であり、それ以外の可能性としては学芸と暴力、調和と破壊といった対比も考えられる。これらを『センスス・コムニス』の議論と対応させると、自由や平和の図像は、対等なからかいと議論からなる対話を支持する著者の態度を世界観として表現したものであり、他方で、束縛や戦争の図像は、そうした対話の作法に憤り、世俗的な権力に訴えることも辞さない「熱心家」（Zealots）の態度を対照的な世界観として表現したものだと推測される(15)。

注

（1） 本稿の図像はローレンス大学が公開している第2版の画像から引用した。Shaftesbury, Anthony Ashley Cooper. “Selected pages from Characteristicks of men, manners, opinions, times.” *Selections from Special Collections*. 7. Accessed 30 September 2020, [https://lux.lawrence.edu/selections/7].

（2） *Shaftesbury, Anthony Ashely Cooper Earl of: Standard-Edition*. Band I, 3. Edited, translated and annotated by Wolfram Benda, Wolfgang Lottes, Friedrich A. Uehlein and Erwin Wolff, frommann-holzboog, 1992.

（3） *Standard-Edition*. Band I, 3, p. 200.

（4） *Standard-Edition*. Band I, 3, p. 202.

（5） *Standard-Edition*. Band I, 3, p. 200, 202. プリュギア帽（Phrygian bonnet）とは古代プリュギアで制作された縁なし帽であり、古代ローマにおいて解放奴隷がかぶったことから自由を象徴する帽子として扱われるようになった。“cap, n.1.” and “Phrygian, n. and adj.” *OED Online*, Oxford University Press, June 2020.

（6） *Standard-Edition*. Band I, 3, p. 202.

（7） *Standard-Edition*. Band I, 3, p. 202, 204.

（8） *Standard-Edition*. Band I, 3, p. 202.

（9） *Standard-Edition*. Band I, 3, p. 202.

（10） *Standard-Edition*. Band I, 3, p. 202, 204.

（11） *Standard-Edition*. Band I, 3, p. 204.

（12） ただし、中央の区画の必ずしも明示的でない要素として、エチオピア人を一段高い台に乗せるという指示が挙げられる。これは『センスス・コムニス』がエチオピア人の笑いの優位を述べていることに対応すると考えられる。The third Earl of Shaftesbury. *Sensus Communis*, London, 1709, p. 35.

（13） ヘルメスについては以下を参照した。Romani Mistretta Marco. “Hermes the Craftsman: The Invention of the Lyre.” *Gaia : Revue Interdisciplinaire sur la Grèce Archaïque*, numéro 20, 2017. Toucher le corps dans l'Antiquité, pp. 5-6, n. 3.

（14） オリーブは平和を表す古典的な象徴である。“olive, n.1 and adj.” *OED Online*.

（15） 本研究はJSPS科研費JP18J22823の助成を受けたものである。